

詞書の一致、不一致とは関係がないようである。

注6 今井源衛『紫式部』（吉川弘文館）三十頁・三十一頁

注7 『平安朝歌合大成』第六卷「永久元年十一月少納言定通歌合」考証。  
なお、『夫木抄』所収六首のうち四首は「よみびとしらず」であり、  
参加した歌人の構成は定かでない。

注8 ただし、建長六年西園寺三首歌合については歌合本文を確認しえて  
いない。

注9 二首とも「入道中務宮宗尊親王家歌合」の詞書を持つ、藤原能清朝  
臣の作である。この歌合は、弘長元年七月に行われた「將軍宗尊親  
王家百五十首歌合」のことかとおもわれるが、古典文庫『未完中世  
歌合集 下』所収の同歌合には、『御所本』一四九番「けふもまた  
おなじ山ぢにたづねきてきのうはさかぬはるを見るかな」は採られ  
ていない。ただし、『御所本』よりも時代の下る『新後撰和歌集』  
には春歌上に「中務卿宗尊親王家歌合に」の詞書で、五句「花をみ  
るかな」として採られており、『新後撰和歌集』が『御所本』を資  
料として当該歌を入集させたのでない限り、『御所本』の詞書の誤  
りとは考えられない。もう一方の七〇七番「ひさかたの月のこほり  
のなとりがはなきならはすなみのをとかな」は古典文庫所収の「將  
軍宗尊親王家百五十首歌合」に七十八番左の歌として勝の判が下さ  
れている。またこの歌も『御所本』より後の『新千載和歌集』秋歌  
上に「中務卿宗尊親王家歌合に」の詞書で、初句「秋の夜の」の形  
で採られている。したがって、あるいは、一四九番歌は現存の「將  
軍宗尊親王家百五十首歌合」とは別の宗尊親王主催の歌合の作かと  
も思われるが、今のところ判断は保留としておきたい。

注10 未刊国文資料第四期第六冊『別本和漢兼作集と研究』（昭和五十一年、  
島津忠夫・日比野純三）百七頁

注11 『笠間影印叢刊 御所本和漢兼作集』解題六頁。なお、漢詩と和歌

『御所本和漢兼作集』の和歌（二）（木戸）

の合計では、『御所本』撰者の有力な候補者とされる藤原基家のほ  
うが多い（漢詩三首、和歌七首）。

（一九九六年十月三日受理）

じ「建久六年民部卿歌合」の歌が、一方は歌合名を明記し、一方は明記しない形で採録されているのである。このことも、先に第三章で論じたごとく『御所本』が『万代集』を資料としていない、または『万代集』と資料を共有していないことの証拠となりうる。

B表の歌合が平安時代のもので違うのは、平安時代のB表に見られた、比較的小規模で私的な歌合という性格が見えないということである。確かに鎌倉時代歌合は、『平安朝歌合大成』という網羅的な研究がなされている平安時代の歌合にくらべて、いまだ研究途上の分野といえる。本稿においても、参照したのは『新編国歌大観』と『群書類従』に所収の歌合程度であるから、見落しがあることは十分考えられる。そのことを勘案しても、平安時代のA表B表のようなはっきりした性格の違いが見られないのは、単に、内裏か個人の邸宅かなどという歌合の場合だけではない理由が二つの表の間にあるのかもしれない。

また、B表では、『御所本』の和歌と他の歌集所収の和歌との間には、単純な誤写以外の異同は見えず、同時代であるだけに異伝がまだ生じていないらしいと考えられる。

## 五

以上、『御所本和漢兼作集』の和歌について「歌合歌」という視点からの考察を試みたが、出典についてはよくわからない、という不本意な結論となってしまった。

しかしながら、『御所本』中の歌合歌は現行の歌合本文を出典としているのではないということは言えそうである。また、『御所本』の歌合での歌であることを記す詞書は、歌合名を記すだけで、歌題、成立年次など他の詠歌事情はいっさい書かないという形式で統一されていることから、『御所本』撰者がそれぞれの出典から無神経に採択し

たのではなく、撰者の何らかの意識が働いているらしいこともわかる。今後は、特に鎌倉時代の歌合を中心にもっと詳細に調査すると同時に、今回手を付けられなかった定数歌との関連を考察する予定である。

注1 但し、原則として後人の撰による秀歌選的な歌合は取り上げない。

注2 歌合本文とは『平安朝歌合大成』にとられた本文をいう。

注3 『平安朝歌合大成』のこの歌合の構成内容の項において、萩谷朴氏は『後拾遺集』に当該歌の作者を橘為義としていることについて

惟成は三十二才で従五位上藏人左少弁、花山院が皇太子時代の東宮学士で、宮中にこの上ない権勢を揮った時代、長能と為理は共に六位の藏人でもあったのであろうか。因みに、為理は、後拾遺集に為義の字を宛て、橘道文の子（道文は一条天皇乳母橘三位と同胞、和泉式部の夫道貞とは従兄弟）としているが、十卷本に従って為理をとるべきであろう。理の字には、ヨシという名乗訓があるので、後拾遺集は誤ったものと思われる。為理は、花山院の皇太子時代、東宮学士や侍読を勤めた菅原輔正〔当時、大宰大貳兼式部権大輔正四位下〕の男である。

（『歌合大成』第二巻 五九三頁）

と述べている。時代的にも為理のほうが作者として適切かと思われるが、『後拾遺集』が誤ったというよりも、『後拾遺集』がよった資料にすでに橘為義という異伝が生じていたものと思われる。

注4 当該歌は鎌倉後期の私撰集『夫木抄』にも採られているが、第三句は歌合本文と同じ「すごもれる」である。

注5 『別本和漢兼作集』と『御所本』との間の違いかという可能性も考えられるが、『後拾遺集』との共通歌である『御所本』五八九、二三九、八二一、九八四番歌のうち、現存する『別本和漢兼作集』にもとられていないものは二三九番のみであって、『後拾遺集』との

らはにしもがれにけり」がそれである。『御所本』の詞書は「寒草」、作者は藤原定通としている。この「少納言定通歌合」は歌合としては現存せず、『歌合大成』によれば、『夫木抄』所収の六首の歌の詞書に「永久元年十一月定通家の歌合に」とあることからその存在が知られるという。『夫木抄』には『御所本』九七六番歌に該当する歌は採られていないが、『夫木抄』所収分の歌から歌題が少なくとも「寒草、雪、氷、恋」の四つであったことが<sup>注7</sup>わかる。九七六番歌は、当該歌合の主催者藤原定通の作であり、詞書も歌合の歌題に一致することから、この「永久元年十一月少納言定通歌合」での作と考えてよいだろう。

#### 四

前章までで平安時代の歌合歌について考察してきたが、鎌倉時代の歌合についてはどうであろうか。

表A『御所本』詞書に歌合であることが記されているものについては、先に平安時代のA表でみたのと同様、内裏歌合や大臣家での歌合がほとんどである。六百番歌合や千五百番歌合のような鎌倉初期を代表する大規模な歌合での作も多い。他の歌集との共通歌において、詞書に大きな異同が見えないのも平安時代の場合と同じである。<sup>注8</sup>

また、前稿でも述べたことだが、『御所本』詞書に「千五百番歌合」とあるもののうち、五〇四は表中に記したごとく現行の千五百番歌合に該当する歌はない。この歌については、表には挙げていないが『続拾遺集』春歌下に「道助法親王家五十首歌の中に 河款冬」の詞書で入集しているので、『御所本』詞書は何らかの誤りであろう。

しかしながら、「千五百番歌合」の詞書をもつ歌のうち、『御所本』一一九、四一六、七三九番は歌合本文及び他の歌集との間で歌に異同がある。一一九番歌は『御所本』第二句「いとにたまなく」を『新古

今集』と「千五百番歌合」のどちらも「いとにたまぬく」としている。この場合ひらかな一字の違いで、歌の意味の上からも「たまなく」よりも「たまぬく」のほうが適切なので、『御所本』の単純な誤写とかがえることができる。

だが、四一六番「まちかねつやどやかへまし郭公おなじみやこもわきてなくらん」では、初句「まちかねつ」第五句「わきてなくらん」が、「万代集」、歌合本文ともに、初句「まちわびぬ」第五句「わきてなくなり」となっている。意味の上からはほとんど変わりが無いが、字形の類似からくる誤写とは考えにくい。『御所本』七三九番「色かはるはやまがすそにしかなきてをばなふきこす野辺のあきかせ」でも、第二句「はやまがすそに」を『万代集』、歌合本文ともに「はやまがみねに」としている。山のすそと山の峰では意味が違ってくるが、この場合も字形の類似による誤写は考えづらい。四一六番、七三九番ともに現行の歌集、歌合以外の資料を用いているのであろう。

また、勅撰集・私撰集との共通歌はないもののうち、「入道中務宮卿宗尊親王家歌合」での作が二首あるのも注目される。<sup>注9</sup>宗尊親王は『別本和漢兼作集』の撰者とも擬せられる真観<sup>注10</sup>（藤原光俊）を和歌の師とする、反御子左家と関係の深い親王であり、現存する『御所本』にも、同時代の作者としてはもっとも多い九首の和歌が採られている。<sup>注11</sup>

表B『御所本』詞書に歌合であることが記されていないものについては、勅撰集・私撰集との共通歌の場合、平安時代の作とは違って、歌集には歌合での作であるという詞書があるものがほとんどなのである。例外は『御所本』四二九番と四九八番である。このうち四九八番は『御所本』よりも後に成立した『夫木抄』との共通歌ということもあり、他の歌集の場合と違うのも、『御所本』には直接の関連はないとも言える。しかし、四二九番は『御所本』成立以前の私撰集である『万代集』との共通歌である。しかも、その同じ『万代集』のなかで、同

う独自本文になっている。『万代集』、『続古今集』、『御所本』ともに、反御子左家の中心的存在である藤原光俊に関わる歌集であるだけに、同じ歌の出典が異なるのも不可解だが、この場合、『御所本』と『続古今集』とが近い関係にあるのは確かであろうである。

共通歌が見当たらないもののうち、問題となる歌合歌に『御所本』四二七番「あたにきく人もやあらむ郭公ぬる夜もなくてまち出たるねを」がある。この歌は「永承五年祐子内親王家歌合」において「郭公」の題で詠まれたものであることが確認できるが、『御所本』以外の勅撰集・私撰集には見えない。だが、同じ「永承五年祐子内親王家歌合」での歌のうち二首は、先に第二章で見たごとく、『御所本』詞書に歌合名を記す形で挙げられているのである。したがって、この四二七番歌だけが歌合本文を出典として歌合名を記さない形で載せられたとは考えられず、この歌も出典は別の資料に求めなくてはならない。

しかしながら、四二七番以外の、歌合本文のほかに共通歌の見当たらないものは、あるいは、歌合本文を出典としている可能性もある。なぜなら、四二七番歌以外は、比較的小規模で個人的な歌合での作だからである。それぞれの作者も歌人としては無名に近い人物がほとんどである。したがって歌合の名を詞書に記す必然がないと、『御所本』撰者は判断したのではあるまいか。実際、第二章で述べたように『御所本』詞書に歌合名を記すものは、すべて、規模の大小はともかくとして公的な晴れの要素の強いものばかりである。そう考えると「天延三年一条大納言歌合」の大納言が気になるところであるが、天延三年には主催者の藤原為光はまだ中納言で、「一条大納言歌合」は後世の呼称である。

同様のことは、他の歌集との共通歌をふくむ歌合歌のいくつかについても言えることである。B表の「保延元年中納言家成歌合」や「嘉応元年頼輔卿歌合」がそれである。これらの歌合歌も、その出典は限

定できないものの、歌合主催者の官位や規模により『御所本』詞書に歌合名を記さなかったとも考えられる。問題は右にも言及した「永承四年内裏歌合」や「永承五年祐子内親王家歌合」、他に「長保五年左大臣(道長)歌合」の歌合名を記さない理由であるが、今のところ、何らかの別資料によるものとしか考えられない。

ところで、右に挙げた「天延三年一条大納言歌合」は『平安朝歌合大成』によれば、六番十二首の小規模なものであり、『御所本』三五九番が九首めにあたる。しかし、この九首めと十首めは十卷本歌合、二十卷本歌合ともに作者名が落ちており、作者は不明とされてきた。『御所本』では当該歌の作者は藤原為時としており、これによって、不明であった「一条大納言歌合」第九首めの作者が判明するのである。『歌合大成』の成立名称、構成内容の項によれば、本歌合は主催者が光および為光と親しい藤原義懷の二人にゆかりのある人々による私的なものであった。藤原為時は妻の為信女が義懷妻の為雅女と従姉妹<sup>注6</sup>とうしであつた縁で親しかったらしい。したがって、本歌合の作者の一人となる資格は十分に有している。

同じく歌合の作者名に関しては『御所本』九八六番が挙げられる。これは「長治元年因幡守重隆歌合」での作である。『御所本』には詞書はないが前の歌の「千鳥」を受けていると判断でき、作者は歌合の主催者である藤原重隆としている。しかし『歌合大成』に載せる歌合本文では、当該歌の作者を藤原忠職とし、脚注に重隆という異伝を伝えている。『歌合大成』は重隆をあくまで異伝として、忠職を作者としているが、重隆を作者とする本文の存在を『御所本』から知ることができる。

『御所本』所収の歌で新たに歌合の歌と推定されるものもある。B表の最後に挙げた「永久元年十一月少納言定通歌合」での作と推定できる『御所本』九七六番「たび人のしをりせしの草なればみちもあ

さくらの花たづぬるかたゑにかきてありしに」とあり、詠歌状況は詳しいが、やはり、どの皇后宮の歌合なのか、後世の人にとってははっきりしない。これらの歌は、二三九番「さくらばな」が『後拾遺集』春下に、二七七番「はるさめに」が『金葉集』春部に入集するが、どちらの詞書も個々の歌合の具体的名称を明記する。これらの場合、歌合本文との大きな異同は認められないが、先の五八九番歌と同じく、勅撰集である『後拾遺集』、『金葉集』、あるいはそれらと共通する原資料を出典とするのが適切であろう。

その他の勅撰集・私撰集との共通歌では詞書の内容に大きな違いは認められない。

平安時代の作で、『御所本』詞書に歌合の歌であると記すもののうち、歌合本文以外に共通歌が見つからないのが「永承内裏歌合」の詞書をもつ八二五番である。しかし、この歌も歌合本文を出典とすると考えるには問題がある。『御所本』では第四句が「いもがこころや」であるのに対し歌合本文の第四句は「いもがおもひや」である。「こころ」と「おもひ」はあるいは、間に「懷」などの漢字表記を介しての異伝かとも考えられるが、第二章で述べる内容も踏まえて別の資料の存在を推定すべきであろう。

### 三

B『御所本』詞書に歌合の作であると記していない二十五首の場合は問題が複雑である。表にあるとおり、勅撰集・私撰集との共通歌のうち、勅撰集・私撰集の詞書には当該歌合の名が記されているものが多いのである。

これらのうち、特に問題となるのは、『御所本』八二一番、九八四番である。この二首はいずれも『後拾遺集』に、八二二番は秋下に「永

承四年内裏歌合に擣衣をよみはべりける」の詞書で、九八四番は冬に「永承四年内裏歌合にちどりをよみ侍りける」の詞書で入集している。『御所本』の詞書は、八二二番が「擣衣」、九八四番は詞書がないが、前の歌と同じとすれば「千鳥」であり、歌合の題と一致する。また歌にも異同はない。しかしながら、永承四年内裏歌合での歌は、先に第二章の最後で見たごとく、「永承内裏歌合」の詞書でも『御所本』に採られているのである。これでは、前記八二五番と、ここに挙げた八二二、九八四番は、歌合本文ではない別々の資料を出典とすると考えるしかあるまい。

同時に、『御所本』詞書に歌合の歌であると記されている場合でも、『後拾遺集』を直接の出典と考えることには問題がありそうである。先の第二章では、『御所本』五八九、二三九番と『後拾遺集』の詞書、作者名とに共通点が認められ、あるいは直接の出典である可能性もあった。だが、同じ勅撰集入集歌でありながら、一方はその勅撰集を直接の出典とし、他方はそうではない、とは考えにくい。したがって、少なくとも、『後拾遺集』共通歌の場合は『後拾遺集』以外の出典を考えなければなるまい。<sup>注5</sup>

同様に、『御所本』の直接の出典と考えがたいものに『万代集』がある。『御所本』九六九番「ちりはててはななき時の菊なればうつろふ色のをしくもあるかな」は詞書「残菊」、作者醍醐天皇御製として載っているが、これと同じ歌が「延喜十三年内裏菊合」にある。しかし、歌合本文ではこの歌の作者を藤原興風としている。当該歌は『続古今集』冬歌、『万代集』秋歌下の二つにも採られているが、『続古今集』の詞書が前の歌の詞書「残菊を」を受けて「おなじ心を」とし、作者名も醍醐天皇としているのに対して、『万代集』は詞書「延喜十三年内裏菊合に」、作者名「興風」としているのである。和歌も、『万代集』では下の句が「いくたびをりてかざしきぬらむ」と、歌合本文とも違

このうち「建長六年三月歌合」と「建長六年三首歌合」は現存を確認していない。

「その他」の項については前表に同じ。

以上、『御所本』の全和歌四百九十四首のうち、七十四首が歌合の場で作られた歌であることが確認できる(三三八番歌を除く)。だが、それらに付された『御所本』の詞書は一樣ではなく、出典となった元の歌集の詞書の書かれ方を遺しているものと思われる。

次章以降は、問題となる歌の詞書を取り挙げ検討したい。

## 二

平安時代和歌のうち、表A『御所本』詞書に歌合の歌であると記されたものは、一見して内裏歌合や内親王家など皇族関連の歌合、大臣家歌合と、公的な晴れの要素が強い歌合での作が多いことがわかる。また共通する歌集の詞書もほぼ同じ内容のものが多く、ただし、『御所本』詞書は何れも「何々歌合」と記すのみで歌題までは書かない。そこで、歌合本文から採られたのか、他の歌集を経てそこから採択されたのかが問題になる。結論から言えば、勅撰集・私撰集との共通歌合本文を直接の出典としてはいないらしい。

例えば『御所本』五八九番「いかにしてたまともわかんゆふさればをぎの葉わけにむすぶしら露」である。『御所本』詞書は「寛和内裏歌合」とあるのみで作者は橘為義朝臣とする。この歌は寛和元年に行われた内裏歌合での作であることが確認できるが、歌合本文では為義ではなく藤原長能の作としている。それに対して、『後拾遺集』では「寛和元年八月七日内裏歌合によみはべりける」とやや詳細な詠歌事情を詞書としたうえで、橘為義の歌としているのである。したがって、こ

の場合、『御所本』は寛和内裏歌合の本文から直接採ったわけではなく、『後拾遺集』あるいはそれと本文の系統を同じくする原資料を出典としていると考えられる。<sup>注3</sup>問題は、『御所本』第二句「たまともわかん」を歌合本文、『後拾遺集』ともに「たまにもぬかむ」としていることである。しかし「に」と「と」、「ぬ」と「わ」はどちらも誤写しやしい仮名であり、『御所本』には、しばしば単純な誤写と思われる独自の本文が存在することから、これも、本来「たまにもぬかむ」であったものが転写の過程で「たまともわかん」に誤られたものと判断できる。

また、順番は前後するが、同じ「寛和内裏歌合」の詞書を持つ『御所本』三〇番「こほりとく風のおとにやふるすなるたにの鶯春をしるらん」は、五八九番と違い、寛和二年六月の内裏歌合での作である。この歌は『雲葉集』にも「寛和御時殿上歌合に」の詞書で採られている。歌合本文と、『雲葉集』、『御所本』とを比較した場合、第三句「ふるすなる」が歌合本文では「すごもれる」となっているのに対し、『雲葉集』では『御所本』と同じく「ふるすなる」となっている。したがって、『御所本』と『雲葉集』とで詞書に小異があることを勘案しても、『御所本』が歌合本文ではなく、『雲葉集』またはそれと同系統の本文を持つ資料を出典としていることは明らかである。<sup>注4</sup>

勅撰集・私撰集のほかに私家集に採られた歌もある。『御所本』二三九番「さくらばなあかぬあまりにおもふかなちらずは人やをしまざらまし」、二七七番「はるさめにぬれてたづねん山ざくら雲のかへしのあらしもぞ吹く」はそれぞれ「祐子内親王家歌合」、「後冷泉院御時皇后宮歌合」の詞書を持つ堀川右大臣こと藤原頼宗の作で、両歌とも頼宗の家集『入道右大臣集』に採られている。このうち「さくらばな」の歌は『入道右大臣集』の詞書には「うたあはせのひのさくらのうた」とあるのみで、具体的な歌合の名称は書かれていない。「はるさめに」のほうは『入道右大臣集』の詞書に「皇后宮のうたあはせに、春雨に

## 鎌倉時代

A. 『御所本』 詞書に歌合とあるもの：一四首

歌 合 名	勅撰集共通歌	私撰集共通歌	その他
後京極摂政家 六百番歌合			四〇三
建仁元年五十首歌合 (老若五十番歌合)		二二二(秋風集)	
千五百番歌合	一一九(新古今) 二一八(新古今) 五二一(新古今) 五三四(統後撰)	四一六(万代) (五三四(秋風集)) 七三九(万代)	五〇四 *三六八(但し 現行の千五百 番歌合中に該 当歌なし)
建保四年 内裏百番歌合	九九九(統古今)	(九九九(秋風集・夫木))	
建保五年内裏撰歌合			五八二
建長六年三月西園寺 三首歌合	一七七(統古今)		
入道中務宮卿宗尊親 王家歌合			一四九 七〇七

このうち、「建長六年三月西園寺三首歌合」は実物を確認していない。

「その他」の項については前表に同じ

『御所本和漢兼作集』の和歌(二)(木戸)

B. 『御所本』 詞書に歌合とないもの：一九首

(○は詞書に歌合歌であることが記されているもの)

歌 合 名	勅撰集共通歌	私撰集共通歌	その他
建久六年民部卿 (経房)歌合	二二〇(○統後撰)	(二二〇(○万代)) 四二九(万代)	
建仁三年影供歌合		四九八(夫木)	
元久元年春日社歌合	一〇〇一(○新古今)		
元久二年詩歌合		二二〇(○夫木)	二二一
建保二年月卿雲客妬 歌合			八八一
建保五年冬題歌合	九九六(○統後撰 但し建保六年内裏 歌合とあり)		
承久元年内裏百番 (十首)歌合	五九〇(○統古今) 八二二(○統古今) 九二九(統拾遺)	(五九〇(○秋風集)) (八二二(○秋風集)) (九二九(○万代・雲葉 但し歌合に、とのみ))	
宝治元年十首歌合	四四四(○統拾遺)	(四四四(○秋風集・抄))	
建長六年三月歌合 (未確認)	三一(○統古今)		
建長六年三首歌合 (未確認)	七七(○統拾遺)		
文永二年 八月十五夜歌合			八〇九
文永二年 九月龜山殿五首歌合	七〇六(○統古今) 八三二(○統古今)		
建治元年 摂政家月十首歌合			六四四 七九七

「その他」の項目で歌集名を記していないものは、『御所本』及び歌合本文以外に当該歌が確認されていないことを示す。

B.『御所本』詞書に歌合とないもの：二五首

(◎は詞書に歌合歌であることが記されているもの)

歌合名	勅撰集共通歌	私撰集共通歌	その他
延喜十三年 亭子院歌合	二九二(新古今)		
延喜十三年内裏菊合	九六九(続古今)	(九六九◎)万代 但し藤原興風 作として出)	
天延三年一条大納言 (為光)歌合			三五九
長保五年 左大臣(道長)歌合	四六一(◎詞花)	(四六一◎)後葉)	四六二
永承四年内裏歌合	八二一(◎後拾遺) 九八四(◎後拾遺)		
永承五年 祐子内親王家歌合			四二七
大宰大貳資通卿歌合			九四三
永保三年後三条院女 四宮侍所歌合			三四九
永長元年 権大納言歌合			二九四
永長元年 権大夫(藤原能実)歌合			四二〇
長治元年 因幡権守重隆歌合			九八六

天仁三年 山家五番歌合	四七〇(金葉) 四七五(千載) 五九一(千載)		
元永元年 内大臣家歌合	九三四(千載)		
保延元年 中納言家成歌合	六四七(千載)	(六四七◎)後葉) 八六四(万代◎)後葉) 九五四(◎夫木)	
保延三年閏九月中宮 権亮経定歌合			六四八
嘉応元年頼輔卿歌合	九四四(◎新古今)	(九四四(玄玉))	
安元元年 右大臣兼実歌合		八八二(玄玉)	
元暦元年神主重保別 雷社後番歌合	七〇一(◎千載)		(七〇一◎)長方集)
永久元年十一月少納 言定通歌合			九七六

「その他」の項については前表と同じ



# 『御所本和漢兼作集』の和歌(二)

木戸裕子

本稿では前稿に引続き、『御所本和漢兼作集』(以下『御所本』と呼ぶ)所収和歌と、歌合との関連を調査し、気付いた点を記す。

なお、参照した資料は『新編国歌大観』『平安朝歌合大成』『桂宮本叢書 第十四輯』『群書類従 和歌部』『私家集大成 平安・鎌倉』である。

一

『御所本』所収の和歌の典拠は勅撰集・私撰集を初め、多くの歌合・定数歌に求められる。前稿では勅撰集と私撰集に直接の典拠を求められるかどうかを調べた。その結果、三代集所収歌においては、ほぼ、『御所本』の出典と認め得ることが判明した。また、従来いわれてきたごとく、『秋風集・抄』とも密接な関わりがあるらしいこともわかった。そこで、本稿では三代集以降の平安時代和歌と鎌倉時代和歌について、より詳細な情報を得るべく、平安後期から特に盛んになった歌合からの収録歌を拾い上げる。<sup>注1</sup>

『御所本』所収の歌の詞書には歌合の歌であることを明記したものとそうでないものがある。それらを時代別に分類したのが次表である(数字は『新編国歌大観』『御所本』番号)。

『御所本和漢兼作集』の和歌(二) (木戸)

平安時代

A。『御所本』詞書に歌合とあるもの：一六首

( ) 内の番号は重複するもの。

歌合名	勅撰集共通歌	私撰集共通歌	その他
ある所の歌合	八五二(古今)		
天徳内裏歌合	三六六(拾遺集) 拾遺抄		
天禄三年女四宮歌合 (野宮歌合)	六一三(詞花)	(六一三(後葉))	(六一三(順集))
寛和内裏歌合	四八六(続古今) 五八九(後拾遺)	三〇(雲葉・夫木) (四八六(万代))	
永承四年内裏歌合			八二五
永承五年 祐子内親王家歌合	二三九(後拾遺)	一九九(万代)	(二三九 (入道右大臣集))
永承六年内裏歌合		四二五(万代) 四五二(夫木)	
天喜四年 後冷泉院皇后宮歌合	二七七(金葉)		(二七七 (入道右大臣集))
承暦二年内裏歌合	七四三(千載)	(七四三(後葉))	
承暦二年 内裏後番歌合		四一八(万代)	
寛治八年高陽院歌合	四二二(続後撰)		
保安二年 関白内大臣忠通歌合	八六二(新古今)		